



年上のバーのママ

～看板を下ろした、カウンターの内側で～

年上のバーのママ ～看板を下ろし
た、カウンターの内側で～【体験
版】

蜜夜文庫

〓看板を下ろした、カウンターの内側で〓

蜜夜文庫【体験版】

...

第二話 裏路地の、琥珀色

!|scene|scene01.png)

その夜、直人は帰り方を見失っていた。

十一月の終わりの金曜、時刻はもう零時に近かった。橘直人、二十五歳、広告代理店の営業三年目。担当していたクライアントの急な差し戻しで、企画書を三度も組み直し、気がつけばオフィスの窓の外はとうに真っ暗だった。最後に残った先輩に「もう帰れよ」と背中を叩かれて席を立ったのが、二十三時半。駅に着いたときには、上りの終電のテールランプが、ホームの向こうへ吸い込まれていくところだった。

タクシー乗り場には長い列ができていた。冷たい夜風が、コートの襟の隙間から首すじへ流れ込んでくる。晩秋の夜気は、昼のあいだ体に溜め込んだ疲れの上に、薄い氷の膜を張るように冷たかった。直人は列の最後尾に並ぶ気になれなくて、なんとなく、繁華街のほうへ歩き出していた。

始発まで、あと五時間。どこかで時間を潰すしかない。けれど、煌々と明るいファストフード店の窓ガラスに映る自分の顔は、ひどく疲れていて、あの蛍光灯の下に座る気にはなれなかった。ネオンの光がアスファルトの水たまりに滲んで、酔客の笑い声が路地の奥から途切れ途切れに聞こえてくる。この街の華やかさは、今夜の自分には少し眩しすぎた。

大通りを一本入った。もう一本入った。

ネオンの色が薄れて、看板の数が減っていく。飲食店のビルが途切れて、雑居ビルばかりの、昼間なら通らないような裏路地に出た。人通りは、もうほとんどない。街灯の間隔が広がって、足音だけが、濡れたアスファルトに反響する。

——と、その路地の途中で、直人の足が止まった。

古い雑居ビルの、地下へ降りる階段の入り口。そのわきに、小さな看板がひとつ、ぼんやりと灯っていた。すりガラスの内側に電球を仕込んだような、控えめな明かり。木の板に、白い筆文字で、ただ一文字。

「灯」

読み方はわからなかった。あかり、とも、ともり、とも読める。ほかには何も書いていない。BARとも、営業中とも。ただその一文字だけが、深夜の裏路地で、静かに光っていた。

なぜ足を止めたのか、直人にもうまく説明できなかった。ただ、その琥珀色に近いあたたかな光が、凍えかけた体のどこかを、指先で軽くつついてきたような気がした。看板のわきの、地下へ続く狭い階段。その先から、かすかに、ジャズのピアノの音が漏れている。始発まで五時間。一杯だけ。そう自分に言い訳をしながら、直人は、コンクリートの階段を、一段ずつ降りていった。

降りきったところに、重たそうな木の扉があった。

真鍮のノブは、握るとひやりとして、けれど手のひらの中でゆっくり温まっていく。深呼吸をひとつとして、直人は扉を引いた。

その瞬間、外の冷たさとはまるで違う空気が、ふわりと流れ出てきた。

本と、ウイスキーの、甘くて深い香り。低く絞られた照明の、蜂蜜みたいな色。世界の音量が、一段、下がった。頭上を通る地下鉄の遠い響きも、地上の喧騒も、扉一枚を隔てただけで、嘘みたいに遠くなる。カウンターが七席だけの、小さな店だった。奥の一席に、コートを着た年配の男が一人、静かにグラスを傾けている。それだけだった。

「いらつしやいませ」

低く、やわらかな声がした。

カウンターの内側に、女性が一人、立っていた。黒のシンプルなワンピースに、濃い色のエプロン。黒髪を、うなじの上でゆるくまとめている。年上だ、と一目でわかる、静かな落ち着きがあった。まとめきれなかった髪がひと筋、頬のわきに落ちていている。彼女は磨いていたグラスを布に置いて、直人のほうへ、目だけで微笑んだ。

「お一人ですか。……どうぞ、お好きな席へ」

直人は、緊張しながら、入り口にいちばん近いスツールに腰を下ろした。木のカウンターは、長い年月のあいだに触れられ続けて、飴色に艶を帯びている。手のひらを置くと、ひんやりと、それでいて滑らかだった。目の前の棚には、背後から灯りに透かされた酒瓶が、ずらりと並んでいる。琥珀色、飴色、黄金色。それぞれの液体が、光をふくんで、宝石みたいに光っていた。

「……あの、こういうお店、初めてで」

正直に言うと、彼女は「そうですか」と、少しも笑わずに、けれど声だけで笑ったような相槌を打った。

「かしこまらなくて大丈夫ですよ。……何か、好きなものはありますか。お酒でも、なんでも」

好きなもの、と訊かれて、直人は言葉に詰まった。居酒屋のビールと、コンビニの缶チューハイくらいしか思いつかない。それを正直に言うのと、彼女は今度こそ、目元をやわらかくして笑った。

「じゃあ、一杯だけ、私に選んでもらってもいいですか。……お疲れの日に、合うものを」

疲れの日に。なぜわかつたんだろう、と思う間もなく、彼女は棚から一本の瓶を取り、背の低いグラスを、カウンターに置いた。

そして、氷を削り始めた。

大きな氷の塊に、銀色のアイスピックの先が、小気味よいリズムで当たる。かつん、かつん、と乾いた音が、店内の静けさにきれいな輪郭をつくった。彼女の手つきには、無駄がなかった。長い指が氷を回し、角を丸め、あつという間に、透きとおった球体をひとつ作り上げてしまう。それをグラスに落とすと、こと、と澄んだ音が鳴った。

瓶を傾ける。琥珀色の液体が、氷を伝って、ゆつくりとグラスに満ちていく。その一連の動きを、直人はぼんやりと見つめていた。カウンター越しの、ほんの数センチの距離。そこで行われる所作の、ひとつひとつが、なぜか、見ていて呼吸が深くなるような静けさを持っていた。

「どうぞ。……無理せず、少しずつ」

差し出されたグラスを、直人は両手で受け取った。ひとくち含むと、まず、香りが鼻に抜けた。焦げた木のような、蜂蜜のような、複雑な甘さ。それから、喉の奥を、じんわりとした熱が下りていく。凍えていた体の

芯に、小さな火が灯ったみたいだった。

「……あたたい、です」

思わず漏れた言葉に、彼女は「よかった」とだけ言った。

酒が回るといふより、緊張が、一枚ずつ剥がれていく感じだった。直人は、自分でも意外なほど、ぽつりぽつりと話し始めていた。今日の残業のこと。終電を逃したこと。始発までここにいてもいいか、と訊くと、彼女は「もちろん」と頷いた。

「今日、企画がぜんぶ差し戻しになって。三回、作り直したんです。……で、結局、最初の案がいちばんよかったねって」

「あら」

「あらって……。ほんと、あらですよ」

自分でも驚くほど、愚痴が口について出た。会社では、こんなことは言えない。先輩にも、同期にも、弱音を吐けば「みんなそうだよ」で片付けられる気がして、いつからか飲み込む癖がついていた。それが、初めて入ったバーの、名前も知らないママの前で、するすると出てくる。

彼女は、口を挟まなかった。ただ、カウンターの内側でグラスを磨きながら、ときどき「うん」「そうですか」と、短い相槌を挟むだけだった。押しつけがましくない。慰めもしない。ただ、聞いていた。その静かな聞き方が、直人には、どんな励ましよりも効いた。この人は、たぶん、ここで何百人ぶんの愚痴を聞いてきたのだらう。それでいて、初めて聞くみたいな顔で、聞いてくれる。

奥の常連客が、そつと席を立つた。彼女に目礼して、静かに会計を済ませ、木の扉の向こうへ消えていく。扉が閉まると、店には、直人と彼女の二人だけが残った。

ジャズのピアノが、低く流れている。頭上を、地下鉄の最終便らしい振動が、遠く通り過ぎていった。

「……終電、逃してよかったのかもしれない」

グラスの中の、小さくなつた氷を見つめながら、直人は言った。

「こんな時間に、あつたかい一杯もらえるなんて、思つてなかつたので」

彼女は少しのあいだ、その言葉を受け止めるように黙つていた。それから、磨いていたグラスを棚に戻して、静かに言つた。

「……こういう店はね、そういう夜のためにあるんです。帰り方がわからなくなつた人が、一杯だけ寄つて、また帰つていく。……それでいいんですよ」

帰り方がわからなくなつた人。その言い方が、妙に胸に落ちた。今夜の自分のことを、こんなにやわらかく言い当てられたのは、初めてだつた。

グラスが空になる頃には、体はすっかりほじめていた。始発までまだ時間はあつたけれど、直人は、これ以上ここにるのは名残惜しいような、もつたいないような気がして、会計をお願いした。

「ありがとうございました」

「こちらこそ。……お一人でこんな時間まで、お疲れさまでした」

コートを羽織つて、スツールを降りる。木の扉に手をかけたところで、彼女の声が、背中に届いた。

「またいつでも、どうぞ。……ここ、金曜はたいいてい、遅くまで開けていますので」

振り向くと、彼女はカウンターの内側で、また新しいグラスを磨き始めていた。灯りの中で、その横顔は、静かで、少しだけ、遠くを見ているように見えた。名前も、まだ訊いていなかった。訊くには、なんとなく、今夜はまだ早い気がした。直人は「はい」とだけ言つて、扉を押した。

外に出ると、夜気が、さつきよりも冷たく感じた。

けれど、体の芯には、まだあの一杯のぬくもりが残つていた。地上へ続く階段を上りきると、裏路地の看板の光が、背後で小さくなつていく。「灯」の一字。あの店の名前は、結局、あかり、と読むのか、ともし、と読むのか。歩きながら、直人は何度か振り返つた。

始発までの時間を、直人は駅前のベンチで、コートにくるまつて過ごした。眠れないだろうと思つていたのに、いつのまにか、うとうとしていた。冷たいベンチの上なのに、体のどこかが、まだ温かった。焦げた木と蜂蜜の香り。氷を削る、かつん、という音。低くやわらかな、あの声。それらが、まぶたの裏で、繰り返して再生された。

家に着いて、ベッドに倒れ込んだのは、明るくなつてからだつた。

そして、直人は、久しぶりに、夢も見ないほど深く眠つた。

※

それからの一週間、直人は、あの店のことを、思い出さない日はなかった。

仕事は相変わらず立て込んでいた。差し戻された企画は、結局最初の案でどうにか通って、けれどその達成感も、月曜の朝には薄れていた。灰色の毎日。満員電車、モニター、電話、また電話。二十五歳の日常は、色のない布のように、平らに続いていく。

ただ、その平らな布の上に、一点だけ、色のついた場所ができていた。金曜の夜。あの、琥珀色の光。

水曜の夜、コンビニで缶ビールを買おうとして、直人は手を止めた。冷蔵ケースの前で、あの一杯のことを思い出したのだ。氷の球体を伝って、ゆっくりグラスに満ちていく、琥珀色。この缶を開けて、部屋で一人で飲んでも、あの温かさは戻ってこない。そう思うと、缶ビールを手取る気が、なくなった。

——行ってみようか。今度の金曜。

そう思ったとき、直人は、自分が少しどきどきしていることに気づいて、戸惑った。ただの、たまたま入ったバーだ。ママは、初めての客の愚痴を、仕事として聞いてくれただけだ。あの「またいつでも」も、きつと、誰に対しても言う、決まり文句なのだろう。わかっている。わかっているのに、金曜が近づくにつれて、胸の奥のその一点が、少しずつ、明るくなっていくのを止められなかった。

金曜の夜。

その日は、定時であることができた。直人は、家に帰る電車を、途中の駅で降りた。繁華街のネオンをくぐり、大通りを一本、また一本と入っていく。先週は迷いながら歩いた裏路地を、今夜は、まっすぐに歩いていた。

そして、あの雑居ビルの、地下へ降りる階段の入り口で、直人は足を止めた。

小さな看板が、今夜も、ぼんやりと灯っている。

「灯」

その一文字を見上げて、直人は、ひとつ深呼吸をした。それから、先週とおなじように、けれど先週よりは少しだけ迷わずに、地下へ続く階段を、一段ずつ、降りていった。